# マラー教授を招聘して第３回放牧サミット開催される

第３回放牧サミットが８月27～28日に帯広で開催された。これまでは農水省畜産部の事業を日本草地畜産種子協会が受託する形で行われていたが、今回から畜産草地研究所も主催者の一人として役割を担うこととなった。

今回のサミットは「放牧酪農の課題と展望」というテーマで、放牧酪農が離陸期にある北海道で行われた。酪農家や関係者330人余が参加し、熱気にあふれた会議となった。

基調講演を行った矢坂雅充東京大学助教授は、放牧酪農の技術的特徴をメガファームと対比して、マニュアル化が難しく、より家族経営に適しているとまとめるとともに、消費者、生産者ともに放牧酪農にかってない関心を寄せていると報告した。

ジャーナリストの増田氏も、BSEの問題、スローフードの考え方から放牧酪農に象徴される畜産物生産の方向性に期待を寄せた。

畜産草地研究所で招聘し、特別講演を行った米国ペンシルバニア州立大ローレンス Ｄ マラー教授は「米国でも1980年代の後半から放牧酪農が見直されてきた」と、米国での放牧酪農の動きを紹介するとともに、個体乳量ではなく、利益を最大にするための補助飼料の給与法について最新の研究成果をもとに解説した。

引き続いて、北海道浦幌町共同利用模範牧場、翌日の現地見学牧場の橋本さん、地域ぐるみで放牧酪農に取り組んでいる足寄町、府県で放牧を取り入れている中島牧場、動衛研の公共牧場放牧疾病調査など盛り沢山の発表が行われた。

翌日は、個体乳量は7,500kgとあまり高くないが放牧依存率が高い橋本牧場、放牧依存率はあまり高くないがTMRを併用して個体乳量が9,500kgと高い境野牧場を見学した。（飼料資源研究官　落合一彦）